

ららばい、通信

Lullaby News

2021年
春号

特集
『親子』

マスクなしの日 きっと来る。
それまでお願いがまんして。



画／大野隆司

[目 次]

- | | | | |
|-------------------|-------------|--------------------------|------------|
| ■ 特集「親子」 | | ■ INTERVIEW／産後ドゥーラというお仕事 | 佐々木 和美 ……8 |
| ● 熊に助けられた幼児期 | 中山 寛 ……1 | ■ 絵解き 風流子ども歳時記 | |
| ● 独立心だけを植えつけてくれた父 | 赤塚 不二夫 ……2 | 「春が来た」唱歌の巻 | 尾原 昭夫 ……10 |
| ● 入れ歯のすごさ | 神長倉 万美子 ……4 | ■ COLUMN／ | |
| ■ ESSAY／地球を買ったら | 米野 宗禎 ……5 | 映画「警女GOZE」にみる親と子の愛情 | 国見 修二 ……14 |
| ■ 連載 直島便り 第13回 | | ■ INFORMATION／CD・書籍 紹介 | ……16 |
| 「今年も春が来た」 | 山根 光恵 ……6 | ■ 活動報告 | ……17 |
| ■ 連載 世界子守唄紀行 第28回 | | ■ 寄付者名簿 | |
| 「ナイジェリアの子守唄」 | 鵜野 祐介 ……7 | | |

2021年4月発行

令和3年

ららばい通信 春号を

お手元にお届けさせていただきます。

桜満開の春、心浮き立つ思いもあり、収束しないコロナの蔓延も心配、何かどこか見えない棘が刺さっているようで、どうもすつきりしません。

おまけに次々起こる地震は十年前の東日本大震災の災禍を思い出させ、気が遠くなりそうに広がる青空を見上げるたびに、むなしいような感傷がよみがえってきます。

見えない敵として突然命が脅かされるコロナの脅威は、改めて私たちの日常を遮断し、罹病は誰が加害者になるか、被害者になるか、まさか、ここでも運の良し悪しに左右されるのか、天のみぞ知るとあつては防ぎようもありません。

ただ怯え震えているうち、とうとう我慢の限界がきて、どんなに政府や行政や医師会が呼びかけてもはや止めようもなく、町は人であふれ、集団で狂ったように欲望のままうごめくありさまとなつてしまいました。

一方で、コロナは大切なことも教えてくれました。当たり前にある日常の大切さ、家族や家庭のありがたさ、命が脅かされると余計かけがえないものの価値観を認識させられました。

そんなに飲みたいわけでも、そんなに外食したいわけでもなく、そんなに遊びたいわけでもないのに、生きている人のぬくもりの中に一緒にいて欲しい相手が欲しいという渴望が強く大きくなつていくのかもしれない。

「家族」つて改めて思います。「家庭」て本当に大事にしていたかなあ、そんなことがふつと頭をよぎる今年の春です。

日本ららばい協会 事務局

東日本大震災から10年が経ちました。

雪が降り、大津波に襲われた気仙沼、陸前高田を訪ねたのは被害が起きて一か月後の四月でした。あの年の四月は寒かったと記憶していますが、今年は三月なのに、春気めいてうららかな陽に桜まではつばみを色づかせていました。

三月十七日、私は震災の後方支援で活躍した遠野を訪ねました。

コロナ禍のため、自由に歩くことは出来ませんが、少しでも被災地のそばに行ってみるつもりでした。同じ時期、数日前に大きな地震が

あり、変更ダイヤとなった新幹線は思いのほか混んでいて、おまけに花巻からの釜石線は強風のため運休、迎えをいただいていたお陰で車で遠野まで入ることが出来ました。人っ子一人歩いていない町、冷たい風と透明な空気、まずは知り合いの店により、改めて震災時の想い出、そう、月日はすでに語りの世界、歴史の中に入り込んでしまっているのです。遠野は語り部の土地、奇妙な魂の気配を感じる町です。

その日、気仙沼の友人と偶然に遭遇することになりました。気仙沼でお会いしたお寺さんの大黒さんです。しかも、その妹さんは陸前高田、あの

東北の春

日本ららばい協会

理事長

西舘 好子

奇跡の一本松のあるお寺に嫁いでいらっしやいます。

「あの頃が今となると懐かしい。皆が同じに裸になり、寄り添わなくては到底生きていけないという思いがいっしょだったから。でも今も当時と変わらないのは一緒に津波にあった猫くらいかしらね。てんでん散り散り、良くなった人も悪くなった人も勝手に生き始めたって感じかしらね。あの頃生まれればかりの子も十歳、いっぱし理屈云うし、津波の怖さは知らない。云つて聞かせようとするとくどいなんて

言われて、私は又津波来るんじゃないのかって今もおちおち眠れないのよ。妹は、住職が亡くなって

跡とれないから今は何もしていないけど防潮堤が出来て海なんて全く見えないから監獄にいるみたいって、こんな味気ないところにいたくなくなってきたって言っている。ぼんやりしていて、結局他人様に町も人も壊されちゃった。人間一度失うと二度と元には戻れないのだね、何もかも。

遠野は変わらないからね、なんか先祖に会えるみたいな場所があるから、時々やつてくる。

さて、明日はその現地に私は行つてきます。

特集

『親子』

親も子は、選んで産んだり生まれてくるわけではありません。

「縁あつてこそ」親子になり、未来永劫この関係は変わりません。

様々な親子関係のドラマは展開され続け、人生を織りなしていきます。

不思議さと予期せぬ事態の連続の中に親子は一緒に歩き続けるのでしょうか。

熊に助けられた幼児期

国際ボディーガード 中山 寛

遠い昔のことですが、私はやくざだったんですよ。それも日本一の大親分の下で働かせてもらつて、一時は私の下に2000人の子分がいたことがあります。私はアイヌ出身ですから、北海道のやくざを束ねていた時期もあります。

なんでやくざになったかつて？その話は、子どもの頃にさかのぼっちゃう。小学校の低学年のときに、母親と別れました。夫婦のことに干渉したくないけれど、大人には大人の事情があるので、ここではよくわからないことにしておきましょう。

父親という人とはにかく怖い人……。力がすごかった。すぐに新しい妻が来て、私にとっては養母、継母ですが、この母親は本当に優しくった。無類に優しい人でした。

それが父親にとっては面白くなって、私に暴力をふるう結果になったのかもしれない。とにかく私が目障りな存在で、いじめること

に、理由もなく、躰の範囲を超えていました。正當性もないのに、やみくもに殴られました。ことあることに暴力になる。こん棒を持ったり、時には刃物を振りかざしたり。叩くとか、蹴るといったレベルでない。殺されると言うことのほうが多かった。

そんな時、私の体に覆いかぶさってかばう、代わりになって罵倒されながら髪をつかまれたりしてくれたのが養母でした。

それですますます父親が怒り、さらに暴力がひどくなった。当然逃げますよね、こっちは北海道だから周りは山しかない。走って走って、疲れ切って倒れてしまった。気が付いたときは、何かあったかい。なんだと思っていたら、黒い熊の体に包まれていたんです。

びっくりするより、心地よかった。恐怖もなく、熊の目を見たら優しい目をしているんですよ。本州の人からみたら、驚くでしょうが、森って怖

いところではないんです。熊も怖くなかった。嘘みたいな話ですよね、熊に抱かれていたなんて。そのときは、熊にサヨナラして家に帰りました。



画／わたなべあきお

れない。アイヌへの差別や社会からの重圧とか、家族への不安感とか、分らない深い闇があったと思うんです。

そんな父親のもとからの逃避が、やくざに走らせたかもしれないけれど、それは私の問題で、そのせいでぐれたなんて言えない。

自分の中では、むしろ、日本一の大親分とその奥さんに助けられ、励まされ、成長したのだと思っっている。特に、親分には人のためになる任侠の生き方を、奥さんからは生活の知恵や、じつさい若いとき結核で死ぬと覚悟していたのが、部屋を与えられ治療までしてくれました。他人が何と言おうが、義理や情というものの本質を教えてもらった。 いわば親ってこんなものかなあ、こんなものであつてほしいって思い続けてきました。

そりあ、やくざと言えば、切ったはった、女を犯したり、弱い者いじめしたり、とアウトローとして、下の下に見られる。確かに、そういうの中にはいるけど、とてつもない大勢の子分が付くような人には、それなりの「心」がなきや、組なんてできませんよ。

私も外国に売られそうになった女子たちを助けるに密航船に乗り込んで大立ち回りのがもとで刑務所にも入ったけれど、迎えて優しくしてくれたのは親分と奥さんでした。

ええ？今どうしているかって。もう、二人とも亡くなつてしまいましたが、それから、やくざも卒業して、社会で本当に困っている人を助けられる人間になりたいと思つて、一人で車を走らせて人助けに回っています。

だからパロディーになる。けれどもこの会話、息子が大学の新生活でなく、新入社員に置き換えても使えるだろう。最近は二十歳を過ぎた大の男の入社式にさえ、母親同伴がすくなくないというから、内容は、歩き方がわからないのと五十歩百歩なのだ。

母親が子どもの教育に熱心なのは結構なことである。

むしろ僕など、まったくかまつてもらえなかったから、羨ましい気持ちにさえなつてくる。しかし、熱心すぎるというのはいかがなものだろう。

「○○先生は立派な先生ですからね、ボクちゃんも○○先生のいる学校に進むですよ」

「△△君は頭がいいから、お友達は△△君だけにしなさいね」

「一流大学に行くには××塾が一番です。もうママが入れるようにしてきてあげました」

と、なにからななまで親が選んで与えてくれる。子どもは、親が敷いたレールに乗っていれば、そこそこの大学を出て、そこそこの会社就職できるという次第。だが、その結果は、母親から五メートルも離れると、もうボクちゃん、歩き方もわからなくなるのである。

一体、子どもの自立心を掴み取るような教育が、ほんとうの教育と言えるのだろうか？……。

僕は、昭和十年、満州・熱河省の承德というところに生まれた。承德というところは満州でも北のはずれ、ソ連と背中合わせの国境の町である。父は警察官で、それも特高警察という、当時を知る人には泣く子も黙る存在だった。僕の兄弟は、妹と弟が一人づつの三人兄弟である。父の仕

暗い世の中、黒い世の中、欲と業にさいなまれている人間の世界は、人のためになろうと思つたら、犠牲など考えないで真摯に立ち向かう自分でありたい。ペンスの後ろに虐待防止や相談の案内ポスターを貼つて走り回つてたよ。私はアイヌ出身でもあるので、アイヌの人たちの相談も引き受けている。

今どうしているかって？嘘じゃなく、世界で困っている要人たちの護衛などもしています。

あとは、月に2回は、富士山にお参りしています。あそこに祀られているコノハナサクヤヒメは、いわば私の母親たち。養母とやくざのとき

独立心だけを植えつけてくれた父

漫画家 赤塚 不二夫（2008年没）

小さい頃、お父さんやお母さんから言われた言葉を覚えていますか。母親の腕の中で聴いた子守唄と同じように、遠い記憶の中におぼえている一言があるのではないでしょうか。1980年に出版された『私を支えている 母の一言』（日本国際連合協会編より、赤塚不二夫さんによる親子の絆の記録を抜粋してみました）

四月の入学シーズンに、僕はこういうギャグ漫画を書いた。

大学に合格した息子と母親が、入学式に出席するため、急いで道を歩いている。と、それまでびっ

のお母さんの2人だと思つて、墓参りの気持ちで、手を合わせます。

父親は、生前、私がやくざになつていて、今でも幅を利かせているという噂を信じて、自分のところにやつてくるのではないかと、ブルブル震えていたと、誰かから聞きました。死ぬまできつと私の存在を怯え続けていたんだでしょうね。

親子って血だけじゃない。情の中にしか育たない、小さなことの積み重ねで、親子になつていくのだと思う。2人の母を思い出しては手を合わせている。2人は血のつながりはないけれど、私にとっては本当の親なんですよ、きつと。

たり母親の後に付いていた息子が、ちよつと周囲の景色に見とれた隙に、母親だけが信号を渡つてしまった。大学生になつたばかりの息子と母親は、道をへだてて向うとこっちにいるわけである。やがて歩行者専用の信号が青に変わる。だが息子は、そこに立ちすくんだまま渡ろうとしない。

母親「どうしたの。早く横断歩道を渡つてこっちにいらつしやい」

息子「ママ。ママがそばにいないと、ぼく。歩き方がわからないよオ」

歩き方がわからない――など、現実にはありうべからざることである。ありうべからざること

事は、いわゆる反共産化の宣撫工作が中心で、そのため一週間に二日ぐらいいしか自宅に戻つてこなかった。また、一つの町の宣撫工作が完了すると次の町が指定されるという具合で、僕の一家は長くて一年、だいたい半年足らずでいつもその周辺の国境の町を転々としていたのである。

（中略）

ただ父はそういう職業柄か、とても厳しい人であつた。本来は人情刑事だったのだが、是是非々のけじめだけははっきりつけていた。当時、父の許へは、いろいろな贈り物が届けられた。それは部下からのお中元やお歳暮であつたり、情状酌量で見逃してやつた共産党の人たちの母親からのものだったりである。だが父は、けつしてそういう品物を受け取るうとはしなかった。たとえそれが鶏卵五個とか十個であっても、である。北満の辺境の地で、卵と言えは僕らには最大のごちそうであつた。

（その後、終戦になり、父はソ連に抑留された。赤塚一家は母子四人で引き揚げ、子どもは親戚の家に別々に預けられた）

僕ら親子が一家揃つて同じ屋根の下で生活するようになったのは、昭和二十五、六年、父がようやく抑留生活を終え、帰国してきてからであつた。

父が帰国した晩、久しぶりに全員揃つた食卓で、父は一同を見回して静かに言った。

「これからは、みんなで頑張つていこうな」

あの厳しかった父とは思えぬ穏やかな口調であつた。そしてこの言葉は、それから後もあるごとに聞かされた。そのせいだろうか、僕ら兄弟は、独立心だけは旺盛になつていった。家が貧乏

だったこともあるだろうが、僕らはみんな中学卒業と同時に就職した。ことに妹など、自分での進路を決め、就職先まで本人が探してきて、名古屋へ美容師になるために単身で行つたくらいであつた。

僕は、なにも自分の境遇をひけらかすつもりはない。それどころか、できれば父のことなど話したくなかつた。当時の父の職業にたいして、暗いイメージを持っている人は多いだろうと思うからである。だが父は、職業人として自分の仕事に一所懸命打ち込んでいた。それだけは間違いないし、僕らはひたむきな父の姿を見て育つたのだ。僕は、子どもの教育で最も大切なのはこれだと思

う。親のひたむきな姿こそが、最大の教育なのではないだろうか。

僕の場合、父も母も勉強しろなどとは一言も言わなかつた。だが、それでも僕ら兄弟は、普通の常識人としての生活が送れるようになってく

ている。むしろ僕は、両親が放任してくれ、独立心を植えつけてくれたことに感謝しているくらいである。

だから僕は思うのだ。

親はなくとも子

は育つ……とま

では言わないにせ

よ、せめて親が亡

くなつたとき。また母

親から五、六メートル離れた

とき、自分の足で歩ける子ども

に育ててほしいと……。



イラスト／堀田一心

入れ歯のすべさ

日本ららばい協会理事 神長倉 万美子

私は、長男を出産したときも長女を出産したときも、産後1ヶ月で会社へ復帰した。それが出来たのは、祖父母のおかげである。私は生後1ヶ月の子を、毎朝、歩いて10分の祖父母の家へ預けに行った。祖父母も曾孫の面倒をみることで、新たな生きがいを見つけてくれたのではないかとも思う。けれども預けられなければ、仕事に復帰することは出来なかった。

長男が生まれたとき、祖母は70歳だった。私の子どもたちは、年寄りの存在がとても身近だったので、自然に人との付き合い方を身につけていったように思う。

息子のカズキの保育園の連絡ノートにこんなことが書いてあった。

今日は、みんなでおじいちゃんの自慢話をしていました。

トコくんが、

「うちのおじいちゃんは社長なんだぜ。すごいだろー」

と言うと、ケンちゃんも

「うちのおじいちゃんも社長だよ」

と言いました。

するとカズキくんが

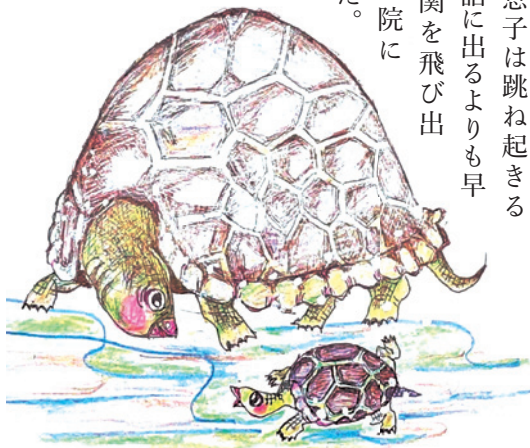
「うちのおじいちゃんが1番すごいな。だって、歯を全部外せるんだぜ！」

と言ったのです。歯を外せるとは、入れ歯のこと。子どもたちはみんな「すげえ」と口をあぐり開けていました。

娘についてもびっくりしたことがある。祖父の所に来ていた訪問診療の先生に「お嬢ちゃんはまだ小学校に上がる前なのに、おじいちゃんが出かけると言う」と、先に玄関に行つて、おじいちゃんの靴をちよつと左右の間隔をあけて履きやすいように揃えるんですよ。いい教育をなさっていますね」と言われたのである。

私が教育したのではない。これは間違いなく祖父母の影響であり、子どもたちが日ごろからたくさんもらっている愛情に、自然とお返しをしたのだと思う。

96歳になった祖父が肺炎で入院していたとき、夜中に電話が鳴った。容態悪化の知らせだったが、息子は跳ね起きると、電話に出るよりも早く、玄関を飛び出して病院に向かった。



イラスト／堀田一心

お医者さんが祖父に懸命に処置をしている様子を見たのは、身内で息子だけである。主治医の若い先生は息子に「家族に囲まれて死なせてあげられなくて、申し訳なかった」と言つたそう。息子はその後、医者になった。

私は出産したという意味では親である。しかし、しっかり子育てをしたのだろうか？仕事に追われ、心に余裕がない中で、子供を育てた。ときに必要以上に子どもを叱りつけることもあった。でも子どもたちにはいつも逃げ場があった。曾祖父母や祖父母が私に代わって守ってくれたのだ。

出産して、子どもという、自分より大事なものがあつたことを、私は教わつた。そして子育てをしたというより、子どもに私が人間として成長させられたのだと思う。

近頃、娘に「やることがおばあちゃんそっくり」とよく言われる。祖母と同じようにペランダの植木をいじり、休みの日になると祖母のレシピを再現する自分がある。こうやって血は脈々とながつていると感じる。

子どもたちが巣立つた今、今度は私が恩返しをする番だと思う。私には子育ての間、祖父母がいた。両親がいた。親戚がいた。近所の人たちがいた。みんなが私の子どもたちを育ててくれた。子育てには、親だけではなく周りの存在が不可欠である。実家が遠いため、近所に話し相手がいなくて孤独を抱える親や、虐待してしまう親、また虐待されている子どもに、役に立てることがあるなら、今度は私が力になりたいと思う。

ESSAY

地球を買ったら

公益社団法人米沢有為会相談役 米野 宗禎



子どもの目線のママに手まりをついて子どもと遊んでいた良寛は、故郷越後でマグネチコード・69という激震を体験しています。死者1443人、ご自身がこの無事であつたことを友人に宛ててこんな書信を残しています。「災難に遭う時節には、災難に遭うがよく候、死ぬ時節には死ぬがよく候。これは災難をのがる妙法にて候、かつた。」あくまでも自然に沿つて生きようとする日頃、いつも子供の純真さを大切にしていたからの言葉でしょうか。

「散るさくら残るさくらもちるさくら」

これは良寛和尚の辞世の句。自然のままにとつて教えがあつた時代の人間らしさを今、老生になつて自分自身に心に沁みて感じています。

世界の論評に押されてか、菅総理は所信表明で「2050年までに温室効果ガスを全体としてゼロ、工場から出る実際の排出量と植物や海洋などの自然による吸収が釣り合った状態にする」と宣言しました。いや、もっと早くに守られることを希望しますが、さて。

世界第二位の経済大国だつた日本は今や環境後進国となり、大量生産、大量消費、大量廃棄による付けが止まらないという中、原発さえも容認しようとしていることを、私たちは重く受け止めたいと思つばかりです。

「地球を買ったら」

という大提案した子どもたちはもちろんのこと、世界の一人、日本のリーダーたちは応え、カネやモノだけではない未来を届けて欲しいと願うばかりです。

私が幼稚園の園長をしていた時の強烈な思い出の「ママです。

ある晴れた日、園庭に出ると「園長先生」と子どもたちが集まってきました。

太陽のめぐみをつけて、子どもたちが飛び回っているのは、自由に伸び伸び遊べる環境で保育をしたという思いからです。集まってきた子どもたちに

「地球を汚すと人が住めなくなるし、みんなもこんな風に外で遊べなくなるよ」という話をしました。

すると、
「地球を買ったら」と五歳の男の子が言いました。

「そつだよ買つてしまえばいいんだよ」

周りの園児たちが

「そつだそつだ」と口を合わせました。

「きれいな地球を買つたら」

「東京に行けば売っているかも、園長先生、今度東京に行つたら、買つてきてよ」

話は飛び火してしまいました。
蓋し名言であると学びつつも、何でも買える、こんな子どもたちに誰がした。と、物、金に汚染された子どもたちの言動にショックを受けました。

今年も春が来た



南無庵 庵主 山根 光恵
山口県長門市出身
浄土真宗本願寺派 布教使



命懸いだ水仙



南無庵の桜

一日一日と暖かくなってきた。
昨年の春はコロナのことが話題になったが、まだその後の大変さは想像もできなかった。
その頃私は心臓発作を起こし、緊急入院のため満開の桜どころではなかったのだ。

退院して戻ってきたら桜は散っていた。
あれから一年、ここ直島でも、島中にあふれていた外国人の姿を見ることはなくなった。

日本人も緊急事態宣言下では、他県からくる人もいない。フェリーもガラガラ。民宿、飲食もみんな休み、ほんとうにひっそりした島になってしまった。

☆

高齢、病後の私は言われなくても毎日が自粛生活。我が「南無庵」もひっそりした中に、庭の草は伸び放題。茶席の軸のごとく

「春來草自生（はるきたりて草自ずから生える）のごとく」の有様。

気温の上昇と共に、庭といえども空き地としか表現できない庭だが、一雨降るごとに地面が緑に変わり、ぐんぐんと草が伸び始めた。
自ら生えるといった悠長なものではない。

さて。この大量な草をどうしたら良いか？草刈り機で刈ったところで、ものすごく強い草がはえて、手に負えなくなるのではないか。雑草がはえる面積を減らすには何か、植物を植えるしかない。

そんな時、近くの飲食店の店先の一輪車に、大量の球根があった。

「あれは？」と聞いてみたら「駐車場を広げたので要らない。誰かがもらってくればよいのだが」

というので、そっくりそのままいただくことにした。

暑い時期だったが、穴を掘り、南無庵の庭に植えることが出来た。そして、昨年の彼岸が過ぎたころ、葉っぱが寒さにもマケズぐんぐん伸びてきた。

二月には寒風にも負けず花が咲き始め、しだれ桜の根元にまるで裾模様のように、真っ白な花が満開になった。

捨てられる運命の水仙が、土と水と太陽のぬくもりと光の「ご縁」をいただいて、見事に花を咲かせて、命を次の世代につなぐことが出来た。

全てのものは繋がりがあってお互いを支え活かしあっていると思うと白い花が愛おしく思える

☆

考え方によつては、コロナもまた何かを繋ぎ、何かを教えてくれているのかもしれない。花を愛でながら、所詮、時間は前にしか進まないし、もとに戻ることは出来ないという生き物の時空を考え、どんなに苦しくても、今を頑張つて生きろしかないと季節の花に教えられる。

来年は三月に瀬戸内芸術祭が行われる。大勢の観光客は望めないかもしれないが、芸術は人の知恵を進歩させてくれるツールだと思う。皆と一緒に手を取り合つて楽しいこと美しいと五感で味わえる祭典になることを心待ちしている。

☆

それにしてもこのコロナ早く収束してほしい。ワクチンが日本にも届き、医療従事者、そして高齢者の順に接種すると言うがそれはありがたいことだけれど、若い人にも早くしてあげて欲しい。南無庵でそんなことを考えて日々を送っている。

世界子守唄紀行

鶴野 祐介 (立命館大学教授)

第28回 「ナイジェリアの子守唄」

前々回、前回と紹介した一九九三年五月放送の英国BBCラジオ3「ラバイズ（子守唄）」の番組冒頭に流れたのは、激しいドラム（太鼓）の音と手拍子に乗せて歌われる中央アフリカ共和国の子守唄だった。日本のいわゆる「江戸の子守唄」に「でんでん太鼓に笙の笛」という一節があるが、ここで打ち鳴らされるドラムの音量は郷土玩具でんでん太鼓のような生易しいものではない。「これで本当に子どもは眠れるのだろうか？」と首をかしげたくなるほどの圧倒的な迫力である。かくて、子守唄に対する「常識」を吹き飛ばそうとする番組制作者の「トラップ（罠）」にまんまと引っかけた筆者は、以後三十年近く「子守唄ってなんだ？」と自分に問いかける旅を今も続けている。

西アフリカに位置するナイジェリア連邦共和国にもドラム伴奏付きの子守唄が伝承されている。カナダのキャシユベッグズ (Cass-Beggs) 夫妻編『民衆の子守唄 (Folk Lullabies) 』（一九六九）収載の「Yeke Omo Mi」の楽譜にはドラムの譜面が併記されており、ドラムとヴォーカルとの掛け合いは両者があたかも対話しているかのようだ。

ああ泣かないで 私の小さな宝物
ああ泣かないで 私の小さな宝物
あなたのママは ここにいるから
ああ泣かないで 私の愛する宝物…

ナイジェリアの位置



川田順造『聲』（一九八八）によれば、サハラ以南のいわゆる黒人アフリカには「トーキング・ドラム（話す太鼓）」と呼ばれる、太鼓の音で言語メッセージを伝える文化が伝承されている。例えば、西アフリカの旧モシ王国では王宮付きの楽師が九〇〇句余りもの長さの王家の系譜を太鼓の音だけで「語る」のだという。具体

砂時計型太鼓



さや有難さを喚起する」といった効果があるという。
この社会の人びとは、感覚神経が研ぎ澄まされている乳幼児期に人間の声と合わせて太鼓の音を繰り返し聞かせることで、太鼓の音に言語メッセージを聞き取る感性を磨こうとした、それがこうした子守唄の伝承背景にはあるのではないか。本連載の中でこれまでも触れてきたように、眠りへと誘うことだけが子守唄を歌う目的ではないのだ。

ところで日本にも、ホトトギスやカラスなどの鳴き声に言語メッセージを聞き取る「聞きなし」の昔話や、アイヌ民族の「ホロルセ」や八丈島の子守唄「テテンクンクン」など鳥の鳴き声を模倣した「あやし言葉」を持つ子守唄をはじめ、鳥や虫や動物の鳴き声、風のそよぎや川のせせらぎなど身の回りの音環境に幼い時から慣れ親しむための仕掛けを持つ文化が数多く伝承されている。環境教育やSDGsの観点から子守唄の意義をとらえ直すこと、それは今後の重要な研究テーマになるに違いない。



INTERVIEW

【インタビュー】 佐々木和美 〈聞き手・樋田敦子〉

産後ドゥーラというお仕事



女性にとって妊娠・出産は大仕事です。特に産後は、体の変化だけではなく、ホルモンバランスも変化するため、精神的にも不安定になりがち。日本では、4人に1人の母親が産後うつ、のリスクがあるといわれ、特にこのコロナ禍の影響で人との接触を避けるため、そのリスクは急増しているといわれています。

また母親が孤立すれば、虐待にもつながりかねません。そんな母親たちの強い味方が、産後ドゥーラです。昨秋から産後ドゥーラとして仕事を始めた佐々木和美さん(34歳)にお話をうかがいました。



―産後ドゥーラはどういうお仕事ですか。

「産後のママに寄り添って、安心して赤ちゃんとお過ごせる環境を作るのがドゥーラの仕事です。新生児の沐浴など赤ちゃんのお世話のもとより、掃除、洗濯、料理などの家事全般、上の子のお世話など、ママのご要望に応えています。産後は横にならないと回復しませんから、休息をとってもらえるように“安心して子どもと向き合えるように”状態を整えています。私は6年前にドゥーラという仕事を知り、資格を取って、この仕事を始めました」

ドゥーラは、一般社団法人ドゥーラ協会で資格を取れば、だれでもなれる仕事で、宗祥子代表は、今でも現役の助産師で、出産を終え退院していく母親をみてみると、産後うつになる危険性があると考え、退院後のサポートできる知識を持ったスタッフを作りたいと2012年に協会を設立した。

―ドゥーラを目指すきっかけが何かあったのですか。

―困ったことは。

「家政婦と勘違いされているかたがいることですね。実際にやっていることは同じかもしれませんが、母子の手助けになりたい一心でたくさん勉強を積んできました。もちろんママが望んでいるなら、すべてやります。でもそれが今本当に必要か必要かはわかります。まずはお互いを知り、良い関係を築くことが先です」

―2人のお子さん育てていて、さらに赤ちゃんを産んだばかりのママをみるのって大変ですね。

「はい、しんどいときはあります。なので自分の家庭優先にしています。私が笑顔じゃないと私の家族は笑顔にならないし、私に余裕がないと、ママたちのサポートはできない。それをしじみ感じます。

夫と子どもにも助けられることはありませんよ。夫は家事も分担してくれて、私が子どもと一緒に寝落ちしてしまうと、お茶碗が洗ってあって、お米も研いであったり。感謝しています。子どもも“今日ママ頑張ったんだ”という、よしよししてくれます(笑)。子どもにも頼っていますね」



「考えてみると私自身、産後うつでした。5歳と3歳の女の子がいるのですが、上の子を妊娠して出産したときに、夫の仕事が忙しく平日は育児参加が望めませんでした。夫が帰宅するまで自分一人で育児をし、家事もする。話す相手もいません。ふとした瞬間、この子の命はすべて私次第と思い、ものすごく不安が襲ってきた。ここで手を滑らせて亡くなったら私のせい。ミルクを詰まらせたなら私のせい、という思いが積み重なってノイローゼになったのです。そのときの育児日記を読み返すと『頑張らなきゃ、もう限界、逃げ出したい』と書いてありました」

―どうやって解消したのですか。

「月に1回訪ねてくれた保健師さんと話していると救われたのです。このままではだめだ、人と会わなきゃと思い、生後3か月から児童館に通いました。そこで出会ったママ友は、私のように夫が多忙だったり、単身赴任でいなかったりと、みんなピリピリして、子どもとふたり、ぎりぎり生活していることがわかりました。なんで子どもを産んだことで、ママが心身ともに追いつめられていくのか。本当はママが幸せに生きることが家庭の幸せにつながるんじゃないかと考えました。出産を機に家にいましたので、ママが幸せになれるような仕事を探し、見つけたのがドゥーラだったのです」

―産後に依頼を受けるママたちはどんな状態なのでしょうか。

「産後すぐに依頼が来るママは、小さく生まれたけれど大丈夫?」などの心配はありますが

―このコロナ禍で子育てもしにくいですね。

「出産してもコロナが怖いから、地方に実家がある人は、田舎に帰ってくるなど言われ不安に思うママたちは、どうしても家で孤立する傾向にあります。そんなママたちが1か月後に笑顔になれるお手伝いがしたい。私はドゥーラがゴールじゃなくて、今後はママたちが幸せになれるコンテンツを考えていきたいと思っています」

※ドゥーラとは、ギリシャ語で、女性を援助する知恵ある女性の意。

(料金)経験により違うが、佐々木さんの場合、1時間2500円で2時間から。交通費は別途。自治体によってはドゥーラの料金を助成しているところもありますので、居住の区のホームページを確認を。一般社団法人ドゥーラ協会のホームページでドゥーラを探せます。

<https://finddoulas.net/>



「産後すぐから関わり。1か月たったときに“子育てどう?”と聞くと、“楽しい、赤ちゃんがかわい”と返ってきて、私、泣きそうになりました。やってきたことが間違ってたかった。私自身1か月ではそんなふうに思えませんでしたから。ママが笑ってくれるのがいちばんです」

―ママたちから言われた言葉でうれしかったことは。

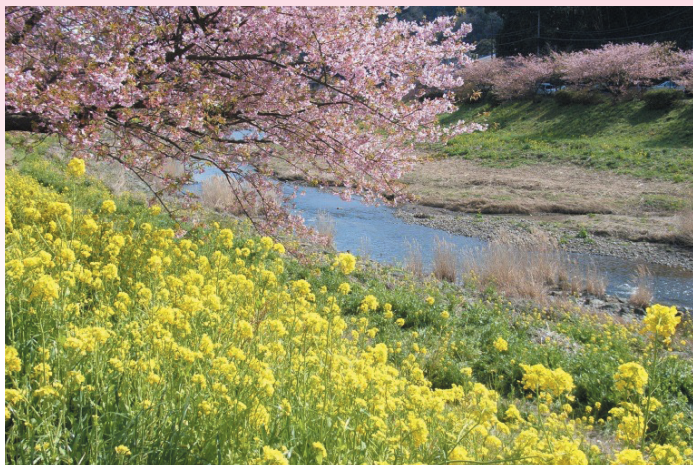
―そういうママにはどのように接しますか。

「産後すぐってみなさん興奮状態なので“休んでください”といっても、遠慮したり、気になることを相談したりと、横になる気にはなりません。でもそのときに育児の不安を聞きだします。沐浴はどうしたらいいんですか、赤ちゃんがミルクを吐くんですか。さまざま悩みをすべて聞く。一通り話してもらった後に“寝てください”という、すんなり寝てくれます。休息を取った後に、子どもがかわいいと思えるような余裕が生まれます」

風流子ども歳時記

「春が来た」唱歌の巻

わらべうた研究家 尾原昭夫



伊豆の春 撮影 尾原 昭夫



うたのほん下 文部省 昭和16年(1941)



尋常小学読本唱歌文部省 明治43年(1910)

の小川」「おぼろ月夜」などの清らかな歌声が流れる。日本人なら誰しもうたいたいくなるこれらの唱歌は、じつはもう百年以上も前に偉大な明治人の努力によって創りあげられた子どものための新しい音楽文化であることをつよく思う。今みんながうたっている「春が来た」は、もちろん小学校で習った「唱歌」や「音楽」の教科書に載っている歌であるが、私の収集する明治以来の唱歌教科書のなかに、歌詞はほぼ同じでもそれとは別の旋律もあったことを示していて驚かされる。開成館が明治二十九年(一八九六)に発行した『新編教育唱歌集第一集』「野あそび」である。

春を迎えるよろこび

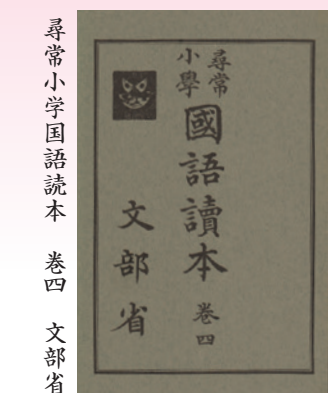
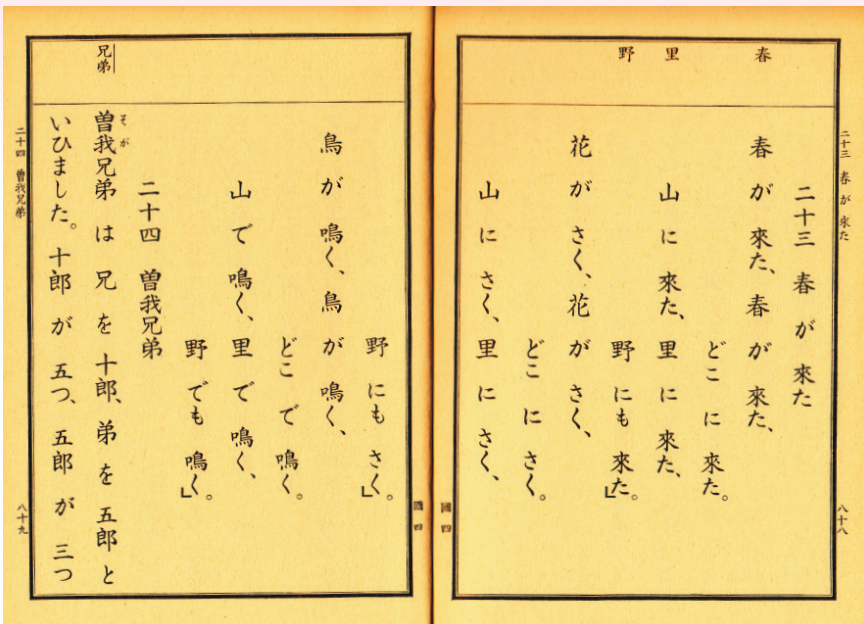
暖冬とはいえ、暗く寒い冬が遠ざかり、明るく暖かい春がやって来るよろこびは大きい。冷たい北風、行く道をさまたげ、車を滑らせ、雪下ろしや雪かきの過重労働を強いる

雪とのたたかいに明け暮れる日々から、太陽がぐんぐん力と輝きを増し、ツクシもフキノトウも、スイセンもツバキもサクラもモモも、きそいあつて生命をふくらませる春へ。小鳥はさえずり空に舞い、人も新たな希望に胸がときめく。学校の窓からは「春が来た」「春

『野あそび』
一 春がきた。 春がきた。 どこにきた。
山にきた。 野にきた。 さとにきた。
二 花がさく。 花がさく。 どこにさく。
山にさく。 野にさく。 さとにさく。
三 鳥がなく。 鳥がなく。 どこでなく。
山でなく。 野でなく。 さとでなく。

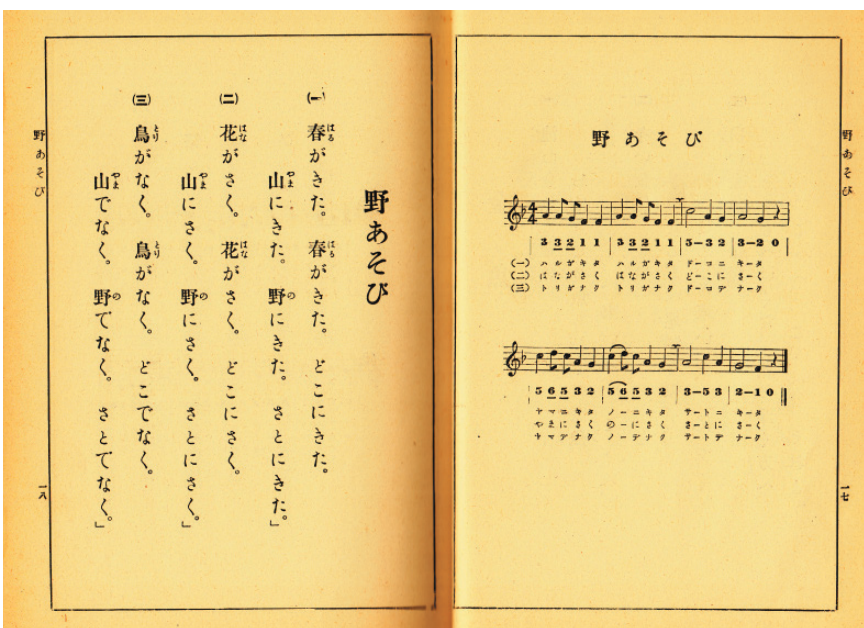
『新編教育唱歌集』開成館 明治二十九年

尋常小学国語読本 卷四 文部省 昭和3年(1928)



尋常小学読本唱歌 文部省 明治43年(1910)

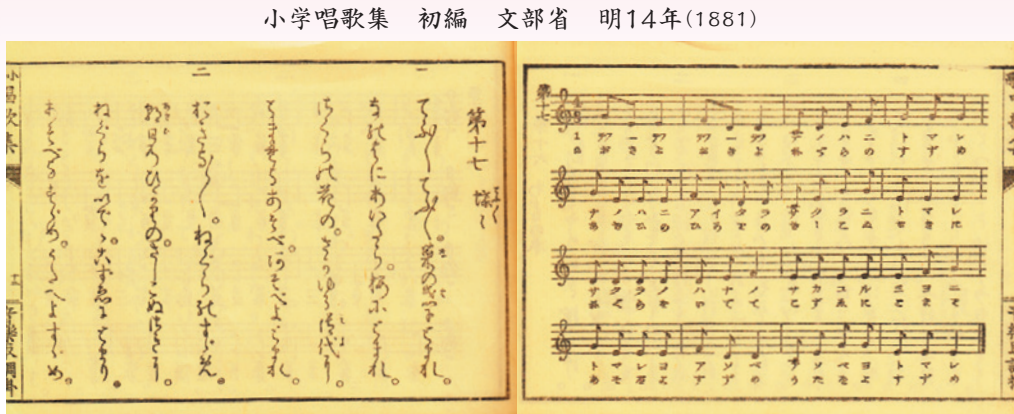
文部省発行の国定教科書に「春が来た」が初めて載ったのは、それより十四年後の明治四三年(一九一〇)の『尋常小学読本巻五』、つまり尋常小学校三年生の国語の教科書で、同じ年にやはり文部省が発行した『尋常小学読本唱歌』に国語教科書に連動する形で、読本の歌詞に新たに曲をつけた楽譜が載った。それが連綿として今にうたいつがれてきたわけであるが、その国語科と唱歌科が連携するという画期的な編集、つまり国語では「詩として読み」、唱歌では「歌として歌う」という有機的関係が成り立っていたことは注目にあたいする。開成館の「野あそび」では歌詞にわずかの違いがあるから、その間に歌詞の修訂が行われ、曲は「見わたせば」(のちの「むすんでひらいて」と似た旋律で始まり、後半に「春が来た」と似た部分もあるにせよ、まったく別ものなのだ。作曲家は高野辰之、前者の作曲者は未詳、後者の作曲は岡野貞一である。高野辰之は長野県出身の国文学者で、



新編教育唱歌集 第一集 開成館 明治29年(1896)



蝶々(玩具)
江戸後期
草双紙切抜帖より



小学唱歌集 初編 文部省 明14年(1881)

てふてふとまれ。菜の葉にとまれ。
菜の葉がいやなら手にとまれ。

曲はおそらく伊沢修二がアメリカ留学中に音楽教育家メーソンほかから収集した多くの外国曲のなかの一曲で、スペイン民謡である。金田一春彦氏によれば初めは「ボートの歌」であったという。ここではハ長調で、明治二〇年の『幼稚園唱歌集』ではト長調、明治二九年の『新編教育唱歌集』ではニ長調と、調を変えてあいついで採用されている。作詞は一番が野村秋足で、本居宣長の孫弟子にあたるという国学者である。金田一氏はその歌詞について『「菜の葉にとまれ」は「菜の花にとまれ」とありたいところ。拍数の加減でこうなったが、卵を産みつけることを勧めるようでちよつとおかしい。』と違和感を述べておられる。しかしじつはその背景には江戸時代からの小唄(流行唄)やわらべうたがあり、またその玩具まであったのである。浅草の僧、釈行智が文政三年(一八二〇)に書きしるした貴重なわらべうた集『童謡集』に次のようにのる。



蝶々売り 江戸名所図会
長谷川雪旦画
天保5年(1834)頃

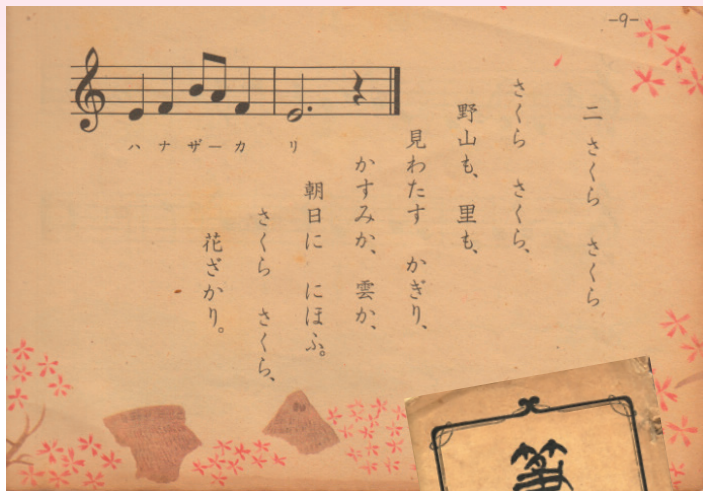
なお、戦後の教科書では歌詞の後半を「さくらの花の、花から花へ、とまれよ遊べ、遊べよとまれ。」と替え、それが今にうたいつがれている。

と記録する。長短いろいろ、長いものは三尺もある細竹の先につけた紙製の蝶々を、江戸の子どもたちはヒラヒラと飛ばし舞わししながら春のよるこびをうたい遊んでいたのである。

蝶々もとまれ、とんぼもとまれ、
それとーまった。

喜多村信節の『嬉遊笑覧』に「宗因が句に世中は蝶々とまれかくもあれ (略) 京師八坂の茶屋のことをかける草子に、てふてふとまれの小歌出たり、件の句はこれをとれり。然らば菜の葉にとまれと云ふは昔の小歌なり。」と柳亭種彦の説を記し、その歌をとった「蝶々とまれ」という玩具に言及している。喜田川守貞の『守貞漫稿』(のち『近世風俗志』として活字化)にも玩具「蝶々」の構造の詳しい説明のあとに、江戸の玩具売りの声を、

うたのほん下 文部省 昭和16年(1941)

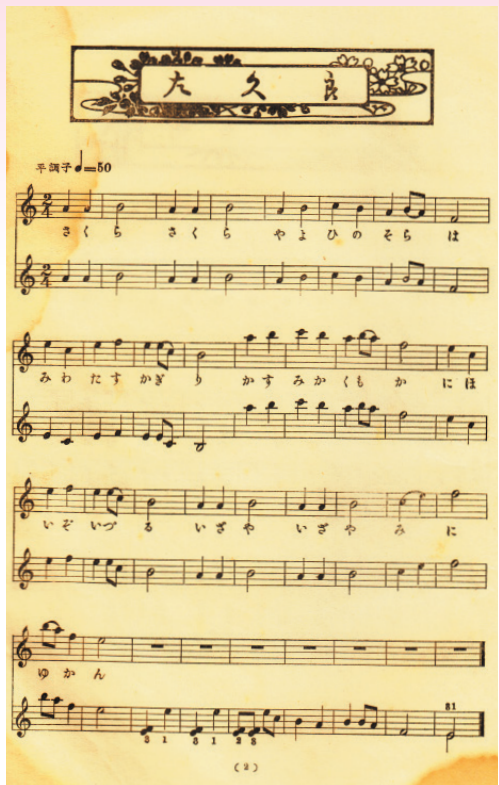


箏曲集 東京音楽学校編
大正3年(1914)

れる。それを二重奏の形で五線譜にのせ最初に収載したのは東京音楽学校編『箏曲集第一編』で、大正三年(一九一四)の発行である。

桜さくら、弥生の空は、見渡すかぎり、
霞か雲かにほひぞいづる、
いざやいざや見にゆかむ。

『箏曲集第一編』東京音楽学校編 大正三年



箏曲集 第一編 東京音楽学校 大正3年(1914)

さくら さくら

筆者が中国へ行つたとき、現地の箏で演奏してくれた最初の曲が「さくら」であったし、諸外国の合唱団がアンコールにうたうのも多く「さくら」である。本居宣長の「敷島の大和心を人間はば朝日に匂ふ山桜花」をひきあいにださずとも、富士山とともに桜ほどに日本を象徴するにふさわしいものはほかにない。さらに、短いけれどその旋律も最初の一節を耳にするだけで胸をうつ、まさにすばらしい日本の代表曲である。

上記のように「さくらさくら」が最初に小学校教科書にのつたのは昭和一六年(一九四一)の『うたのほん下』で、第二次大戦開戦が迫る時代を反映し小学校は国民学校に改称、教科も視野をひろげ唱歌から「音楽」に変わった時代であった。なお、「さくら」には山田耕筰のピアノ伴奏による不朽の名編曲があることもつけくわえておきたい。

さくら さくら、野山も、里も、
見わたす かぎり、
かすみか、雲か、朝日に にほふ。
さくら さくら 花ざかり。

『うたのほん下』文部省 昭和六年

「てふてふ」蝶々ちようちよう

幼稚園や小学校低学年で誰もがうたい踊った記憶のある「ちようちよう」の歌。この歌が最初にのつたのは『小学唱歌集初編』である。図版に示すように、幼い子ども向けの教科書でも、とてもむずかしい文字であった。

一 てふてふ てふてふ。菜のはにとまれ。
なのはにあいたら。桜にとまれ。
桜のはなの。さかゆるみよに。
とまれよあそべ。あそべよとまれ。

『小学唱歌集初編』文部省 明治四年

映画「瞽女GOZE」にみる 親と子の愛情

詩人 国見 修二

「母と娘：愛と慈しみの物語」

これは、映画「瞽女GOZE」のポスターに、書かれてある言葉である。

瀧澤正治監督の映画「瞽女GOZE」が新潟県で昨年8月から上映され、今年も全国で上映されている。最後の越後瞽女と呼ばれた、小林ハルさんを主人公にしたものである。生後3カ月で失明したハルの将来を案じた母親が、瞽女として自立した生活を送れるようにと、鬼となつてハルを躰け、ハルも必死になつて応える物語である。

映画では、日常生活のたしなみ・礼節、着物の着方や畳み方、櫛の使い方などを徹底して母がハルを躰ける。時には頬をぶつた。ハルが「おら、もうできない」というと、母親は「できないなら、おまんまは食べさせない」と、できるまで躰けた。針に糸を通す場面では、畳針の大きな穴通しからはじめ、最後には普通の針の穴に糸が通せるように練習をする。

今、社会問題となつてきているいじめや虐待には、愛の力ケラも愛情の力ケラもない。虐待することで何も生まれはしないのだ。この映画を観て、昔のような忍耐、がまんばかりするのは、教育的ではないと大人は言うかもしれない。そんなことはない。8月に福島県の中学校で、この映画を全校の生徒に観てもらふ機会があった。その中学生の感想の一部である。

「ぼくは、映画を観てとても感動しました。特に印象に残った所は、ハルさんが吹雪の中で歌っているシーンです。お母さんの愛情がハルさんを強くしたのだと思います。また「苦は楽の種」という言葉を知りました。「楽」した分だけ「苦」が来て「苦」の分だけ「楽」ということが分かりました。目が見えない人を差別したりいじめたりするのはだめだと思いました。この瞽女さんみたいに、ぼくも、人を差別しない人になりたいです」(1年生)

「私は瞽女を観てハルのお母さんが、ハルにとっても厳しくしていたのが、母の愛と分かっていても見ていて辛かったです。でもお母さんがハルに厳しくしたお陰で、ハルは立派な瞽女になれてよかったです。目が見えないけれど、瞽女の人たちは、皆前向きに生きていてすごいと思いました。ハルがまた今度生まれて来られた時は、明るい目をもってきてほしいと思います。」(2年生)

ハルが「もうできない」と叫ぶと、母親はハルの手を取りながら言う。「指先だけが目ではない。口も舌も心もみんな眼なんだぞ」と。それを聞いてハルは一生懸命に練習して、とうとう針に糸を通すことができた。また、寒稽古と言つて歌声を徹底的に鍛え上げる場面がある。薄着のまま冬の信濃川の土手に立ち、雪の中で一人で早朝から大きな声で歌うのである。夕方練習する。吹雪の中を必死に一人歌う場面は、観る方も涙が流れ「がんばれ」と声を出したくなる。

今、このような躰、練習をやれば、体罰、虐待だと言われるだろう。当然、体罰はあつてはならない。しかしながら、子どもに本当に教えなければならぬこと、身につけてほしいことなど、親はそこまでを覚悟して真剣に一生懸命に養育しているのだろうか。

ハルは5歳で親方に弟子入りして、瞽女となつた。11歳の時に南会津への旅にでた。理不尽な親方の要求にもがまんして、難儀な80里越の峠を登り南会津へ着いた。家に帰るまで3カ月

以上もの旅である。また山形県への旅では、親方は「修行のためだ」と言つて、泊まる家を二人でハルに探させた。しかしながら、母親が鍛えてくれたお陰で挨拶などしっかりした行動がとれて、だんだんと認められていく。また、自分の歌が、村人に褒められる場面もある。

瀧澤監督は、ハルさんとの出会いについて次のようにいう。

僕はハルさんに出会つた時、瞽女さんと瞽女唄を知つた時、何か自身の心を浄化する感動を覚えました。人生、人を羨ましがらず、人を差別せず、人を恨まず、人に飲びを与え、健気に生きた姿と、彼女らの言葉は人生に飲びと勇氣と生きる力を授けてくれ、自分が抱える悩みや辛さ、哀しさ、イジメもとるに足らないものだと思ひつき、全てが解き放され、挫けそうない心を励ましてくれました。映画「瞽女GOZE」を完成するまでには、十七年という歳月がかかりました。でもその間多くの人々と出会い、多くを学びながら挫けず、諦めず、人の冷たさ、興味のなさにもめげず、必ず瞽女映画を成し遂げるといふ夢と力と目標を持ち続けられたのは何か、漸くここへ辿り着いて分かつたのです。それは：瞽女力という目に見えない偉大な力を自然と学び、それを活かして来た事だと、僕はあらためて小林ハルさんをはじめ時代を生きた多くの瞽女さん達に心を込めて深く感謝をします。

国見修二著『瞽女力入門』に寄せてより



- 良い人と歩けば祭り 悪い人と歩けば修行。
- 自分のころろさえ汚さなければ、人様の温かい真心が見えて素晴らしい人に出会ふ
- 誰もが苦しい時代だったが、人の心はやさしかったね。
- 一人の力ではなくみんなの力です。

当たり前だが、生きることとは「苦」の後に楽あり「楽」の後に苦あり」の両方を体得することなのかもしれない。人間は、人とのつながりなしでは生きては行けない。現代は子どもに、大きな愛のもとでの「苦」を経験させない風潮があるような気がしてならない。この映画「瞽女GOZE」を沢山の方から、そして若い人たちからも是非観ていただき、親と子の愛情について考えてほしいと願っている。

活動報告

■子守唄オルゴール、YouTubeで配信中！
睡眠障害が急増しています。
子守唄で癒してください。

3月より、YouTube「ららばいチャンネル」を開設し、子守唄オルゴールを配信しました。1日一曲ずつ更新したところ、子どもの寝かしつけとともに、癒されると大好評。

「江戸の子守唄」「中国地方の子守唄」など日本の子守唄をはじめ、「ブラームスの子守唄」「シューベルトの子守唄」など西洋の子守唄も網羅。

3月29日からは「赤ちゃんがよく眠る子守唄オルゴール」と題した17曲のロングバージョンも登場。今後もYouTubeでさまざまな子守唄の配信をしていく予定です。チャンネル登録してくださいね。



YouTubeチャンネル「NPO法人日本ららばい協会」

■子ども配食を始めました
「新入学はお金がかかって大変。ららばいさんで食品をもらうのは、とても助かります」という声が聞こえてきました。

子どもの貧困がささやかれて久しいですが、子どもの貧困は親の困窮です。

2月から、毎月第2、4木曜日に「子ども配食」の日を設けています。子ども配食というのは、フードパントリーと呼ばれるもので、ひとり親家庭やコロナ禍で困窮している子育て世帯に向けて、食料をお配りしています。

浅草橋にあるセカンドハーベスト・ジャパンさんより食料品の提供を受け、さらに高砂にある障がい者作業所、高砂福祉館さんのパンをプラスして、限定15世帯（約50人）にお配りしています。

ららばい協会の子守唄事業とともに柱である、子ども子育て事業の一環です。子育て中の母親は孤立しがちで、ましてや、このコロナ禍で外に出ていくことができず一人悩んでいる方もいらっしゃいました。



↑ギニアから日本にやってきた一家。
日本語が話せなかったお母さんの日本語もだいぶ達達しました。
困っているときはお互い様です。



活動予定

■「江戸の子育てと子守唄」
開催日：令和3年6月4日（金）
会場：東京・内幸町ホール

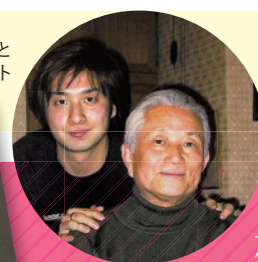
2021年度、ららばい協会では、さまざまなイベントを企画しています。最初の自主事業がこの公演です。3部構成でお送りしますので、期待してくださいね。（チラシ参照）

■2022年、日本子守唄学会発足に向け、準備中。

INFORMATION



松原健之さん 松永伍一作詞「螢よ」をうたう



故・松永伍一氏（右）と
松原健之さんのツーショット

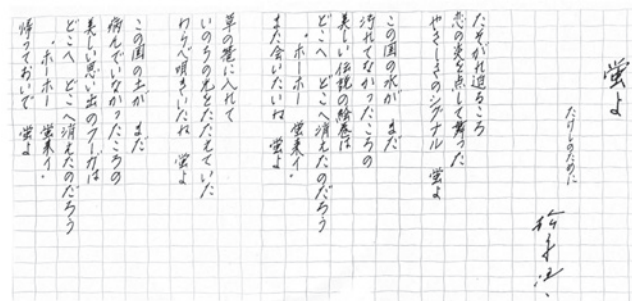


詩人、民俗学者 当協会の初代の会長でいらした松永伍一さんがお亡くなりになって今年は十三回忌にあたります。

三月三日桃の節句に逝かれた松永さんは本当に多彩な方でした。可愛がっていらした歌手松原健之さんに、表紙に「健之へ」と自筆で書かれた大学ノート一冊にびっしり詩が残されていました。

時に訓戒も書き込まれたノートは、詩で埋め尽くされていました。私も見せていただきましたが、松永さんの松原さんへの寵愛がいかに大きく深いものか察することが出来ました。

宝物の詩の中から、松原さんは「螢よ」を選び、今回CDが完成しました。作曲は鈴木淳さん…ぜひお手元に。



松原健之 オフィシャルファンクラブ 03-4434-8347



川村隆枝 著 「介護施設で本当にあったとても素敵な話」

介護は、される方もする方もこれから日本の最大の問題です。

何しろ800万人もいる団塊の世代の皆さまがご高齢になり、対象者となるのですから。川村先生は、麻酔医であり、今の医学の現場から言えばなくてはならない貴重な存在です。

なのに、七十歳にしてきっぱり引退、何と介護施設の施設長に転身なさってしまいました。

多分きっかけは大好きだったご主人の死、その闘病生活を送る人たちへの思いが、見守る側の仕事を選ばせたのではないかと、思います。ご主人は開業医で共に医業に携わるご夫婦。

施設長という仕事をなさるにあたっては、亡きご主人への恋慕があり、入所なさる高齢の皆様への深い思いや心使い、理解が、事細かく書かれていて、ああ、こんな施設に入りたいと思わず口にしてしまいました。老いを学び、老いの中に確かな人生の手掛かりと希望を見つけることができる一冊です。川村先生を応援します。

西館好子

【発行元】 株式会社アスコム 03-5425-6627



